

情報革命と日本語学・再考

蓮沼啓介

【要約】

情報革命の前半である第一段階は情報産業の革命的発展であるが、既にほぼ終了したと認識される。後半の第二段階が始まった。情報革命の第二段階は情報文化の大革命である。生物学の革命と語学の革命が急進する。また哲学の革命が巻き起こる。哲学の革命とは何事か。意味の世界が探求の主題となる。哲学の観念が変わる。時間の観念が変わる。宇宙の観念が変わる。原子模型が変わる。神と人間の観念が変わる。語学の革命では人類共通語の選択が論じられる。

1. 情報革命は前進する

情報革命は今どこに向かっているのか。情報革命の現段階を確認したい。

情報革命については以下に論じたことがあるので参照されたい。拙稿「情報革命と日本語学」日本語学1984、5月号。なお「アッ、猫がいる」神戸法学雑誌、66巻1号、2016。はしがきにおいて拙稿の誤りを訂正して置いた。意味の世界という第三世界の発見者はフレーゲではなく G.E.ムーアである。フレーゲは「意義」を発明した人である。

情報革命の第一段階は既にほぼ終了したと認識される。情報革命の前半の段階に当たるその第一段階は情報産業の革命的発展に結実した。例えばムーアの法則がある。デバイスという素子の性能が二年ごとにほぼ倍になる。こうした実績が確認されている。二年ではほぼ倍々の速度で性能が向上する。これは間違いなく革命である。かくて情報産業はほぼ成熟した。今後は AI の応用の分野に技術革新が向かうと予測される。

さて情報革命は進展する。前半から後半へ情報革命の第二段階に進むと何が始まるのか。それは情報文化の大革命である。ムーアの法則は忘れ去られ G.E.ムーアが再登場する。ダメット先生さようなら。フレーゲの迷宮から脱出する時が来た。

情報文化の大革命では何が変わるのか。生物学の革命が進む。「STAP 細胞はあります」。また語学の革命が急進する（この発表のテーマである）。語学の革命では音声から発話へと研究対象が全面転換する。さらに哲学の革命が巻き起こる。哲学の革命とは何事か。意味の世界が探求の主題となる。哲学の革命の現段階。哲学は対照表に示される。あとは表に説明が加味される。判決とその理由の様に提示される。哲学の革命とは何か。哲学の観念が変わる。哲学の体系から表の哲学へ転回する。哲学は一枚の表に示される。

2. 哲学の革命

哲学の革命の具体例を挙げよう。①時間の観念が変わる。時間は泉から湧き出る流れに似て、一方向に向かう。列車と同じに起点から終点に向かう。時間の観念は直線的な時間から単線的な時間へ変

化する。

直線的な時間は無限の過去に遡り無限の未来に向かう。無限に広がる空間の比喩である。一方、単線的な時間は起点があり一方向に未来に向かう。戻ることはない。源がある時間は実在する時間である。無限の時間は心の中にだけある。まったく空想の産物である。

②宇宙の観念が変わる。宇宙の観念は無限の宇宙から始原のある宇宙に変わる。無限の宇宙は三次元の空間である。座標軸の原点には自己意識が位置する。一方四時元の宇宙には起点があり未来がある。座標軸の原点には起点が位置する。宇宙の起点は神である。従って神は実在する。

③原子模型が変わる。Solar System から Plum model へと展開する。

原子の内部構造は太陽系に似ている。中心に太陽がありその周りを惑星が回る。中心に原子核がありその周りを電子が回る。これが Solar System である。

原子の内部構造はプラムや桃みだ。表面に薄皮があり中に実があり種がある。電子は実は実の波動である。実はデラックの海である。原子核は種である。これが Plum model である。

Plum model は桃モデルと言ってもよい。スモモもモモもモモのうちモデルである。プラムも出るし、桃も出る。だからいわば御馳走の哲学である。フルーツの哲学である。饗宴つまりシンポジウムにふさわしい名称である。プラムや桃の実の部分は宇宙論にいう dark matter に当たるし、原子の間に広がるかすかなもやが宇宙定数である。あるいは dark energy である。今のところ、dark matter や dark energy は観測機器の性能を越えているため微細すぎて検出できない。宇宙は生命にみちた生命体であるから、そのモデルも生き物である果物つまりフルーツの方がふさわしい。野菜や果物の時代がやって来た。

アトミズムの未来を窺って置く。刹那とは無限小の時間のことである。無限大はアレフゼロの濃度であるが、無限小はアレフ 1 の濃度である。それぞれ密度ゼロと密度 1 と呼ぶことにする。図形の密度は 1 である。数の密度はゼロである。この中間に位置する無限の濃度はない。これが連続体仮説であるが、連続体仮説は認知エネルギー節約の法則により成立する。連続体と分離物を区別した方が生存に有利であるからである。事物は分割できない要素から成り立つ。とデモクリトスは語った。事物は原子からなる。原子は元素の要素であり、それ以上分割は出来ない。と近代の科学は説明する。事物は無限小の粒子の離合集散からなる。と新しい学問は説明する。粒子性と波動性を同時に説明できる枠組みである。無限小の粒子とはどの粒子よりも小さいという事である。無限小の粒子はそれ以上は分割出来ない最小の単位である。無限小の粒子は観測出来ない。経験論には限界が生じる。

五感の彼方へ飛び立つ時が来た。(経験論に従い経験論を越えて進む。)

④神と人間の概念が変わる

神の概念は造物主から万物の根源へと変わる。造物主は天地の創造主である。エホバやアッラーは造物主である。

万物の根源は太極の観念を近代的に改鑄したものである。唯一神でなく光と闇の二神になる。ゾロアスターはかく語りき。マックス・ウェーバーやフリードリッヒ・ニーチェを越えて先に進もう。ヒットラーの様に野蛮なゲルマンに向かうのではなく、ゾロアスターをめざし華麗な文明を誇るパルシ

アに向かおう。人間の概念は次の表に示される。

- | | | |
|--------------------|----|----------|
| • 純粹体験
(ヒトビト) | 感性 | 感覚と知覚 |
| • 自己意識
(オノレ) | 悟性 | 反省 (了解) |
| • 全身的体験
(ワレ=ワレ) | 覚性 | 感覚と反省の自覚 |
| • (推理能力)
(ボク=ラ) | 理性 | 推論と演題 |

カントの哲学には覚性の分析が欠落している。これは全身の感覚である身体感覚の形式である身間の概念がカント哲学には欠落しているために発生する不備である。心情と物質をブレンドすれば人生となる。

かくて弁証法は三転する。精神の弁証法（ヘーゲル）は Yes の弁証法である。物質の弁証法（マルクス・エンゲルス）は No の弁証法である。人生の弁証法（ケイ・ハスヌマ）は No には No を突きつける。

- | | | |
|-----|-------|-------------|
| • 正 | 純粹体験 | 主客合一の体験である。 |
| • 反 | 物心二分論 | 主観と客観の分裂 |
| • 合 | 全身の体験 | 主観と客観の再統合 |

性愛は男女の結合であり制作は人と物の結合である。競演は動作の結合であり会議は発話の結合である。

人生の弁証法はこう纏められる。

- | | | |
|-------|---|-------------|
| • Yes | 素朴な日常体験
環境の中の自分・家族の一員・良き国民 | 純粹体験 |
| • No | 自我の目覚め
自分の信念の発見・信仰と信心への道 | 自己意識（主観の過剰） |
| • Da | 使命の自覚
人生や職業の発見や市民としての自覚。
また他人との出会いと結合（恋愛や仕事）。 | 全身的体験 |

精神の弁証法は肯定の弁証法である。物質の弁証法は否定の弁証法である。人生の弁証法は諾定つまり否定に対する否定＝拒絶の弁証法である。性愛に耽り、制作にいそしみ、競演を楽しむ。これが大人の人生である。

3. 語学の革命の現段階

語学の革命とは何事か。音声から発話へと研究の対象が変わる。音声は物質である。空気の振動である。音声認識はパターンの認識である。音は波動であって個物ではない。音を数える事はできない。

個物の認識は全身の感覚による。個物とは嵩や厚みがあるものであり、手にもってないしは抱きかかえて確かめ数えるものである。

視覚による認識は個物の認識にもパターン認識にもなりうる。表面の模様の認識はパターン認識である。表面だけをはぎ取ることはできない。表面は二次元の世界であり、現実から抽象された存在であるからである。

パターンの認識とは波動や波長の認識である。波と並。ひとしなみとは平均のことである。なみなみと注ぐとは容れ物に溢れんばかりに表面が容れ物のふちと水平になるまで注ぐことである。音声のパターンが音韻であり、その波長が **distinctive feature** である。音韻の配列のパターンが単語であり、単語の配列のパターンが句や文である。発話は音声のパターンだけでなく同時に姿勢のパターンや状況のパターンをも組み合わせた複合的なパターンの認識である。状況の中でも聞き手の実在が特に大事である。聞き手が目の前やどこか遠方に実在するという状況が決定的である。

語学は言語の学から発話の学へと飛躍する。言語の学は音声を対象とする。発話の学は音声ばかりでなくその産出のプロセスをも対象とする。人類共通語の生成がその到達目標である。

言語学の退潮が始まっている。一般言語学は知識過剰である。頭でっかちである。人間学としての語学が要請されている。音声ではなくて対話が人間の言語である。(脳内)神経の作動が真の研究対象である。人類が普く有する言語能力の解明が目標である。

発話研究の課題はこうである。発話は人間の行為の一種である。調音器官の働きに加え脳内の神経回路の働きも研究の課題である。発話の研究は発話行為論が先駆的である。G.E.ムーアや中期のWittgenstein や J.L.オースティンが先駆者である。

ケイ・ハスママも先駆者の一人である ㊦。

発話研究の方法はこうである。日常言語の用法を調べるのが基本である。脳内の神経回路の発動を直視するのが一番正確であるが、機器の開発がまだまだである。脳内視鏡の開発が望まれる。当面は日常用法の精査に徹するのが良い。

4. 人類共通語の必要性

地球規模の問題が噴出している。人類には共通語が必要である。人類は普く言語能力を備えている。人類共通語の習得は誰にでも可能である。地域語を残し、共通語を学ぶ。人類全員がバイリンガルになることは可能である。

人類共通語の生成はどう進んでいるか。人類共通語の理論と実際を見て置く。

人類の共通語をどのようにして選ぶか。①自由選択の結果に任せる。自由放任主義の立場もある。この場合今日では英米語がほぼ共通語になっている。

②人類共通語を選択する理論もある。

人類共通語の未来については自然の選択が進行中である。英米語がほぼその地位を固めた。英米語だけでいいのか。それが問題である。平等原則に適うか。自由選択の原則に適うか。英米語だけでは平等原則に合格しない。英米語だけでは英米人ばかりが得をする。英米語だけでは自由選択の余地が

ない。英米語だけでは少数言語が踏みにじられる。

La liberte , l'egarite et la reciprosite. 自由・平等・互恵性と訳す。市民革命のスローガンである。汝の欲せざるところを人に施す勿れ。これが互恵性である。汝の欲するとことを人に施せ。これが博愛である。こちらは押しつけの論理である。

人類共通語の未来には第二共通語も必要不可欠である。第二共通語があればどちらを選ぶか自由選択が可能となる。第二共通語があれば学習負担が平均となる。(第三共通語まであれば一層平均に向かう)。自由と平等を人類全体に保証するには英米語の他に何語を共通語とするのが良いか。(セルビア語はたぶん共通語にはなれない)。人類共通語選択の理論が要をなす。次はその例である。

蓮沼啓介 2010 「正義の理論と地球社会」神戸法学雑誌 60 巻 1 号、291-288 頁。

観察言語と実行言語からひとつずつ選ぶのが学習負担が平均に向かうので適切である。この論文の結論はこうである。英米語が人類の第一共通語であり日本語が第二共通語である。第三共通語はまだ未定(条件付き)である。

理論の骨格はこうである。まず現実的な対話の原則を見定める。①発言の自由と関連性の原則。②発言機会の平等と発言順序の原則。③効率的な意思疎通の原則の三原則が確認される。

その上で共通語の選択が要請される。

共通語の候補は次の選択肢で示される。

- ① 自然言語か人工言語か。
- ② 単一言語か複数言語か。
- ③ (a)英米語だけ
- ④ (b)英米語とフランス語 or ドイツ語 or スペイン語
- ⑤ (c) 英米語と中国語 or ロシア語
- ⑥ (d) 英米語と日本語
- ⑦ (e) 国連公用語
- ⑧ (f) 籤引き言語
- ⑨ (g) その他の組み合わせ。

人工言語では発話行為が発達していないため、議論の枠組みが調達されず議論はできない。従って自然言語が採択される。a は平等原則に反するので取らない。b は欧米語の話し手にばかり有利で取らない。e は学習負担が重すぎるので取らない。f は学習が間に合わないで取らない。c と d が有力な候補となる。実行言語と観察言語から一語ずつ選ぶのが適切であり d が選択される。

残された問題がある。第三共通語はどの言語か。アラビア語と中国語のどちらかである。現時点ではアラビア語である。ロシア語も一応有力な候補であるが、その将来は暗い。中国語を表記する仮名(簡字)が開発されれば、中国語が第三共通語に選ばれる。

中国語は漢字学習の負担が大きすぎる。これは中国語には仮名がないから生じる困難である。簡字を開発する方針については次を参照されたい。

蓮沼啓介 2016 「西周における法哲学の展開(後編)」神戸法学雑誌 62 巻-3 号。46-47 頁。